饗應の一途となし玉ひけり、またその頃石見守貞昌と船越伊豫守永景とは、こと更陸家の風をおこし、玉川の流に遡り、年久しく茶事の宗匠として、その名一時にたかゝりしかば、寛文五年霜月の頃、兩人を御茶室に召れ、其技をなさしめて御覽あり、老臣も陪席して彼等がその技に練熟せしさまを賛嘆し、公にも殊に御氣色にかなひしとて、兩人に饗賜ひ、物など下されしとぞ、

〔筆のすさび上〕茶人の名家たる久田宗全は、雛屋勘兵衛と云て、一條新町に居住す、江岑宗佐の弟子なり、宗全先祖は久田刑部と云て、江州佐々木牢人なり、刑部妻は千利休の妹なり、刑部の男を久田新八と云、入道して宗榮と號す、宗榮の子を久田理兵衛と云、入道して宗理と號す、此人宗旦の弟子にて、江岑宗佐の妹おくれを妻とす、理兵衛實弟を源兵衛と云、藤村宗德の養子となる、宗理の嫡男宗全なり、宗全の弟も亦江岑宗佐の養子と成る、隨流宗佐是なり、宗全の嫡男も亦千家の養子となり、原叟宗佐是なり、

藤村宗德も佐々木牢人にて、江州藤村の人なり、藤村は藤堂邑の隣村なり、故に高虎朝臣、後に宗德を御伽に被召て、五十人扶持を下し賜はる、宗德實子なくして、久田理兵衛が弟源兵衛を養子とす源兵衛も亦宗旦の弟子にて、後に反古庵庸軒と號せし人是なり、

〔茶話指月集上〕利休ノ臺子直傳ハ藤村庸軒一人存命ノ由、此人若シ時古織、〇古田織部正ヲ學ビ、遠州公〇小堀政一ニ親炙ス、强年ニ及ンデ千家ノ蘊奥ヲ探リ、齡八十ヲ過テ一日モ爐火ヲ斷サズ、加之平日書ヲ讀ミ詩ヲ題スルコトヲ好ム、暇アル時ハ茶匙竹筒ヲ製シテ俗事ニ渉ラズ、門流甚ダ多シ、

〔桃源遺事五〕一水戸城神崎といふ所に、若き時より數寄をたしなみ、友なき時も獨此業を友として年月を送る老翁有、桑屋三夢よはひ既に八旬に餘れり、立居も叶はざれ共、此事は尙昔に替らず、明暮翫び樂とす、西山公〇德川光圀彼叟が事を聞召被及、或時宅邊を過させ給ひ、迚、人をして案内せさせ給ひ、頓て御立入候、家は藁を以葺、膝を入るに不過と云まほしき程の住居なれば、增して數寄